

Scott Fitzgeraldの“double vision”について

岡 本 紀 元

(1)

1919年2月18日、Scott Fitzgerald は、恋人の Zelda Sayre に宛てて、次のような電報を打った。

DARLING HEART ENTHUSIASM AND CONFIDENCE I DECLARE
EVERYTHING GLORIOUS. THIS WORLD IS A GAME WHILE I
FEEL OF YOU (R) LOVE EVERYTHING IS POSSIBLE IN THE
LAND OF AMBITION AND SUCCESS. . .¹⁾

ここに見られる、溢れんばかりの自信と感傷と未来への希望は、当時の若き Fitzgerald のすべてであるように思われた。彼は、その2年前から、後に *This Side of Paradise* として輝く成功をもたらすこととなる小説の作成にとりかかっていたが、彼の意気は、友人の Edmund Wilson に書いた手紙の中の、“...really if Scribners takes it I know I'll wake some morning and find that the debutantes have made me famous overnight. I really believe that no one else could have written so searchingly the story of the youth of our generation...”²⁾ という文句にも明らかに表われている。そうして、1920年の春、*This Side of Paradise* が、新しい領域を開拓したものととして注目され、至るところで話題にされはじめると、Scott Fitzgerald は、新時代の代弁者のみならず、時代の典型的な産物の地位にまつりあげられてしまったのである。

1) Matthew J. Bruccoli, Scottie Fitzgerald Smith, and Joan P. Kerr (ed.): *The Romantic Egoists* (Charles Scribner's Sons), p. 48.

2) Andrew Turnbull (ed.): *The Letters of F. Scott Fitzgerald* (Penguin Book), p. 343, 1918年1月1日付の手紙より。

この新しい時代とは、消費の倫理が生産の倫理にとって代り、節約や貯蓄よりも、如何に費やすかに人々の関心が注がれる、といった、刹那的、快楽主義的物質文明が栄えた時代であった。この物質的繁栄は、それとは裏腹な精神的貧困を浮き立たせながらも、新しい世代に物質的成功をいやが上にも意識させずにはいられず、彼らは、*This Side of Paradise* で描かれているように、「貧困への恐怖と成功への崇拜に身をゆだねている新しい世代」として、青春のエネルギーのはけ口を求めるのであった。Fitzgerald は、このような風潮の中で、模範とされたのである。彼は処女作の成功により、Zelda と名声と富とを獲得し、後に、当時を回想して書いた“Early Success”(1937)の中で自ら認めているように、彼は、「意志力とは反対のものとしての運命というものに対して神秘的な見方を持つ」ようになり、「人生をロマンチックなものと思ひこむ破目」になってゆくのである。

一方、1920年に母校のプリンストン大学の総長である、J.G. Hibben に出した手紙では、

My view of life, President Hibben, is the view of the Theodore Dreisers and Joseph Conrads—that life is too strong and remorseless for the sons of men.³⁾

と述べられている。この悲観的な人生観は、それから16年後、娘の Scottie に書き送った手紙で改めて確認される。

I can't give you the particular view of life that I have (which as you know is a tragic one), without dulling your enthusiasm. A whole lot of people have found life a whole lot of fun. I have not found it so...and I feel that it is your duty to accept the sadness, the tragedy of the world we live in, with a certain esprit.⁴⁾

更に4年後、即ち、Fitzgerald がこの世を去る2カ月前、Scottie 宛に繰り返し、

3) *The Letters*, p. 482.

4) *Ibid.*, p. 26. 1936年11月17日付。

… the sense that life is essentially a cheat and its conditions are those of defeat, and the the redeeming things are not ‘happiness and pleasure’ but the deeper satisfactions that come out of struggle.⁵⁾

と説く。無論、20年代後半から10年以上に及ぶ、苦悩の日々を経た後の人生観には苦渋が満ちていて当然とはいうものの、人生が無慈悲なもので、敗北を余儀なくさせるものであるという認識は、処女作を抱いて、希望に溢れていた1920年に既に Fitzgerald の心に定着していたのである。

このように、Fitzgerald には、人生に対する希望と挫折感という相反する感情が同居していたのであるが、それというのも、彼生来の資質に与かるところが大きいと思われる。

プリンストン大学の同窓で、Fitzgerald の「知的良心」(“my intellectual conscience”⁶⁾) としての役割を生涯にわたって果たすこととなる、Edmund Wilson は、Fitzgerald のことを次のように描写した。

…, like the Irish, he is romantic, but is also cynical about romantic ; he is ecstatic and bitter ; lyrical and sharp. He is bound to represent himself as a playboy, yet he mocks incessantly at the playboy.⁷⁾

このようなアイルランド系の気質からくる情熱的なロマンチズムと、そういう自分を冷たく懐疑的に眺めるという傾向は、若い頃からの友人達が等しく認めていたことらしく、Wilson 共々同窓生で親友だった、詩人の John Peale Bishop (1892~1944) も、殆ど同様の観察をしている：

He has the rare faculty of being able to experience romantic and ingenuous emotions and a half hour later regard them with satiric detachment.⁸⁾

5) *Ibid.*, P. 112. 1940年10月5日付。

6) Fitzgerald は “Pasting It Together” (“The Crack-Up” 三部作の1つ) 中で Edmund Wilson のことを、こう呼んだ。

7) Edmund Wilson ; “Fitzgerald before *The Great Gatsby*,” in *F. Scott Fitzgerald : The Man and His World* (ed. by Alfred Kazin), p. 81.

8) J. P. Bishop; ‘Three Brilliant Young Novelists,’ in *The Collected Essays of John Peale Bishop*, pp 229~30.

情熱的な自分を客観的に見つめる、という、彼のこの傾向が、一般に Fitzgerald の “double vision” と呼ばれているものである。元来、この言葉は diplopia とも呼ばれる医学用語らしく、「複視、又は二重視＝1つのものが2つに見える視覚の病的状態」と説明されているものであるが、これを、Fitzgerald の二重性にあてはめて説明したのは、Malcolm Cowley で、彼は次のように説明する。

He cultivated a sort of double vision. He was continually trying to present the glitter of life…; he surrounded his characters with a mist of admiration and simultaneously he drove the mist away.⁹⁾

Fitzgerald は、絶えず時代のきらめきを表現しようと努め、讚美のヴェールを投げかけながら、同時に、それを剥ぎとろうとするのであった。これは要するに Wilson や Bishop の観察と同じことを言っているわけであるが、Cowley は、更に、Fitzgerald は大舞踊会の華やかな渦の中に自分を主役として置き、同時に、窓の外で、入場料はいくらで会の費用は全部でどのくらいだろうなどと考えながら、鼻をガラスに押しつけて覗き込んでいる田舎者の少年として自らを見ている、と喩えている。

(2)

This Side of Paradise の主人公の Amoly Blaine は「金ピカの階級制度を気にするわけではないんだ……でも僕もその1人にならなくてはいけないんだ。」と思い、次作 *The Beautiful and Damned* の主役である Anthony Patch と Gloria Gilbert の生活振りは、「後悔しないこと、無念の叫びをただの一言ももらさないこと、互いの名誉を重んずるという明確なルールに従って生活すること、そして刹那の幸福を出来る限り烈しく執拗に追求することだ」と描かれている。1920年に *This Side of Paradise* と共に鳴物入りで世間に迎えられてから3年余りたった頃の Fitzgerald 夫妻の生活もまた

9) Malcolm Cowley, “Third Act and Epilogue,” Alfred Kazin, *op. cit.*, p. 150.

Anthony と Gloria のそれに近いものだった、と言われている。その後10数年経って、精神障害に倒れた妻の Zelda を入院させ、乱脈を極めた経済破綻を支えるための濫作によって涸れ果てた創作力と、苦悩から逃れるための飲酒によって蝕まれた肉体をかかえて苦吟していた時に自己を見つめて書いた "The Crack-Up" 3 部作の中で、Fitzgerald は、自分が怖れおののいた物と、何故同化してしまうようなことになったのか、理解できない、と述べているが、彼が言いたかったのは、作家として世に出た最初の数年の間に、自分は、自分の魂が反撓する不節制そのものを続けてゆくために才能をすり減らした、ということだった。20年代という華やかな時代の悦楽にとり残された人間を軽侮するような風潮を一方では難じつつも、結局は、自分が、根こそぎに暴きたてようとしたものに惹かれたのであった。彼は、富を得るにつれて、富とは人間に想像する限りの理想的生活を可能にする特性を持つものであり、富を所有している、という条件を想像の及ぶ最も節操ある生活を送ることが、人間にとっての理想である、と考えて、現実での快樂的生活に埋め合せをつけようとしたのであるが、結局のところ、それも、富というのは、美と同様、何らかの形で、破滅と結びついているものだ、という程度の漠然とした結論以上のものを生み出すには至らなかつたのである。

Cowley や Wilson 等が指摘した "double vision" とは、自己を客観視する "detachment" の態度だったが、Fitzgerald の世界観は、富と貧、純粋さと腐敗、若さと老い、といった相反するもの間を揺れ動き、ロマンチックな情熱を持ちつつも周囲の物質主義的世界に同化しそうになる自分自身をシニカルに眺める態度は、各々相反するものに惹かれつつ反撓するという "ambivalence" となって表わされるが多かつた。

このように、陶醉と冷笑という二面性は、見方を換えると、美に対するロマンチックな憧れと、そこに或るモラルを求めようとする倫理性とが同時に存在したもの、とも考えられよう。富に対し、節操ある生活を可能にするものとする発想は、いわばこの二つの感情が一体化したものと思われる。

彼は “I am a romantic and I can't change that…”¹⁰⁾ と述べながら、一方で “…but I guess I am too much a moralist at heart and want to preach at heart in some acceptable form, rather than to entertain them”¹¹⁾ と道徳家めいたことを口にする。彼は意識してこの二つの要素を保ち続けようと努めたに相違ないことは “The Crack-Up” の冒頭の、次の言葉に示されている。

…let me make a general observation—the test of a first-rate intelligence is the ability to hold two opposed ideas in the mind at the same time, and still retain the ability to function.¹²⁾

Charles E. Shain は、作品を信用し、作者を信用するなど言ったロレンスの忠言に従おうとしても、Fitzgerald の場合には容易ではない、と述べているが、¹³⁾ “My characters are all Scott Fitzgerald. Even my feminine characters are feminine Scott Fitzgeralds.”¹⁴⁾ と語った Fitzgerald は絶えず作中人物の中に自己の種々相を投影させた作家であった。彼の言う “a first-rate intelligence” が充分に発揮され、作中人物として最も成功した形で示されたのが、*The Great Gatsby* における語り手である Nick Carraway であり、成功はしていないまでも、少くとも、Fitzgerald 自身が最も生々しく表わされた作中人物の 1 人が *Tender Is the Night* の主人公 Dick Diver ではないかと思う。以下 Fitzgerald の二重性という観点から、この二人の人物について考えてみたい。

(3)

The Great Gatsby の主要人物であり、然も、物語の語り手である Nick

10) Andrew Turnbull : *Scott Fitzgerald*, p. 259.

11) *The Letters*, p. 79. 1939年11月4日付 Scottie 宛の手紙より。

12) *The Crack-Up* (ed. by E Wilson), p. 69.

13) Charles E. Shain : *F. Scott Fitzgerald*, (Univ. of Minnesota Pamphlets on American Writers).

14) Andrew Turnbull, p. 259.

Carraway は、「オハイオ河以西の不様にのびて、ふくれた退屈な町々」¹⁵⁾に嫌気がさし、きらびやかな東部にあこがれて、ニューヨークに出てきた素朴な中西部の青年である。彼にとってニューヨークとは「活気にあふれ、スリルに満ちた夜の空、めまぐるしく行き交う男や女や車の流れが、心せく者の眼に与えてくれる満足感」をもたらす大都会であり、「世界中のあらゆる神秘、あらゆる美がこの中にあるという幼想を、いつも新しく見る者の胸に湧き起してくれる」ところである。この大都会を遠望する時、それは「汚れに染まぬ金の願いを託して建てられたものの如く、真白な角砂糖をうず高く積み重ねたようにそそり立っており」、その白い摩天楼は、国家と個人両方のロマンチックな夢の実現を純粋に包含するかのようになり、Nick の眼に映るのである。

Nick のロマンチズムは、彼が“romantic”という語を頻繁に使うことによっても示される。ニューヨークに出て来て間もなく、彼は、この都会が気に入ってくるが、とりわけ、日暮れ時に5番街をそぞろ歩き、“… pick out *romantic* women from the crowd and imagine that in a few minutes I was going to enter their lives, and no one would ever know or disapprove.”¹⁶⁾という一刻を楽しむ。Tomの邸を訪れ、Daisy や Jordan 共々庭で夕食をするが、Daisy の美しい顔を照らす夕陽が“*romantic affection*”の色を添え、Nick は、彼女の「金の響きのする」声に息を吞んで耳をそばだてる。Nick の軽べつを一身に集める Gatsby の、夢に対するひたむきな誠実さは“an extraordinary gift for hope, a *romantic readiness*”¹⁷⁾として Nick の賛美を受ける。Gatsby のかつての恋人である Daisy が5年振りに Gatsby のパーティで、彼と再会する時、Nick は、Gatsby の世界を評して“After all, in the very casualness of Gatsby’s party there were *romantic* possibilities absent from her world.”という風に Daisy の世界と

15) 日本文で引用する箇所については、大部分が野崎孝訳「偉大なるギャッピー」(研究社)に拠った。

16) *The Great Gatsby* からの引用は Scribner 版を使用した。なお：引用文中のイタリック体は筆者によるものである。

区別する。然も Gatsby の神秘的な過去は、客達に “romantic speculation” をかき立てずにはいられない。

しかしながら Nick は、このロマンチックな都会に、ただ、魅入られてしまっていたわけではない。彼は、その裏側に潜む腐敗や虚偽をかぎつける。Nick にとって、この大都会は、「現実の世界ではないくせに、具体性を帯びた新しい世界で、そこでは哀れな幽鬼どもが、空気の代りに夢を呼吸しながら意味もなく動きまわっている」世界でもある。そして結局、「東部が何より私の心を湧かした時でさえ、そんな時でさえ、私には東部の世界が何かいびつな要素を持っているような気がいつもしていた。」と言い切るのであった。

Nick のこのような二重のヴィジョンは、ニューヨークに対してのみならず、周囲の人間に対しても向けられる。彼は Tom の情婦の Myrtle に興味を抱くが、会いたいとは思わない。夏の日短い恋人に終わった Jordan Baker に対しては、Nick の気持は、魅惑される心と反撥する感情の間を揺れ動く。彼女の不道徳性を目にしても彼は、自分たちの間に積極的に終止符が打てないのである。彼は、自分が持っている中西部のモラルを「自分の欲望にブレーキをかけ内奥の規則」と称し、自分を「頭の回転の遅い」、「泥くさい気むずかしさ」を持つ人間であると卑下するのだが、実際には、決して彼は短絡思考型の狭量な道徳家ではなく、都会の人種たちの、夢を失ったソフィスティケーションを冷やかに眺めながら、表面は何気無さを装うことの出来たたかな人間でもある。彼には、理想を覆されて失意に沈みこむ純情さよりも、時には偽善的俗物臭をすら感じさせる世慣れた強靱さがある。彼には、自らも含めた登場人物すべてについて「恐らく我々には共通して、或る欠陥があるのだろう。」と観察するだけの余裕がある。彼は、腐敗にもいささか心惹かれながら、ある線で踏み止まって品位を守り、想像力と創造力の欠落した真の腐敗の淵へと落ち込むことは決してない。Nick と他の人物たちを分け隔てているものは、モラルのみではなく、優越感もまたあるのだ。

Gatsby の死後、5 番街で買物をする Tom に出会った Nick は、「Tom を許すことも、好きになることも出来ず」、最初は握手さえためらったが、や

がて「まるで子供と話しているような気持ちに」なる。彼は決して傲慢なのではない。Tomに代表される人種の、かつて持ったこともなく、また将来も持たないであろう他人への理解と知的な優越性を身につけているのである。

この Nick が、Tom と Myrtle との情事のための一室があるニューヨークのアパートの窓から、黄昏の街を見下ろしながら、次のように考える。

Yet high over the city our line of yellow windows must have contributed their share of human secrecy to the casual watcher in the darkening streets, and I was him too, looking up and wondering. I was within and without, simultaneously enchanted and repelled by the inexhaustible variety of life. (chap. II)

人生の尽きることのない諸相に魅せられかつ反拗しながら窓の内と外とに分裂していたと自らを語る Nick の姿は、まさに Malcolm Cowley が Fitzgerald の “double vision” として喻えた中西部の少年そのままである。しかも、ここに示されたように、“within and without” という感情を同時に保持する能力というものは、人間の営みに対する十分な理解ある視点を持つための条件でもあるだろう。外部からのみ観察する者は、共感を伴った理解を欠き、余りに対象に溺れる者は、感傷の余り正鵠を期し難い。共感と客観性とを兼備してこそ、真の理解を得る。「二つの相反する思想を同時に持ち、かつ機能させる能力」である「第一級の知性」として、Fitzgerald が生き方の規範とも考えたものは、まさしく、この Nick の “double vision” ではあるまいか。

(4)

The Great Gatsby に遅れること9年、ようやく長篇第4作として世に出た *Tender Is the Night* の場合になると、Nick のような客観性を持った語り手を持たないために、作者と主人公の Dick Diver との同一化が起り、作品としては成功作とは言いがたいのであるが、一方では、そのために却って、ロマンチストとモラリストとの二つの面の間に揺れる Fitzgerald 自身の姿が

生々しく浮び上がってくるように思われる。

Dick Diver は、生来の理想主義者で、ロマンチストである。彼の倫理観は、南部紳士で、牧師であった父親から受け継いだもので、彼は、振幅の広い想像力と精神のバランスを保つ自制心を持つ魅力的な人物として登場する。彼が父から学んだモラルとは、「牧師の世界内で経験した行儀作法に関する単純なものが多く」、「『よき本能』とか、名誉とか、礼儀正しさ、勇氣などに勝るものはあり得ないと信じる¹⁷⁾気持」などであった。要するに、これは、「生き方」、又は「振舞い方」に関する倫理にすぎず、その父も「立派な紳士だが覇気に乏しい」人物だったから、彼自身も「精神の緊張を持続させておく力を欠く」ような人間でもあった。然も「貧しい教区で、父が苦勞するのを見てきたせいで、生れつき欲のない性格に、金銭に対する欲望が宿るようになった。それは、安定した生活を求める健康な必然性ではなかった」と描かれているように、世俗的栄達や繁栄を願う心を宿す人間でもあった。だからこそ、自分を慕う富豪の娘 Nicole と、患者であることをわきまえながら結婚した時、「この時程、自信を持ち、完全に自分自身になったと感じた時はなかった。」と思うのである。

この Dick も、医学の勉強のために、初めてチューリッヒに来た26才の春には、「人間は永久に強く健康であり、人間の本質は善であるとかいった幻想」をたっぷりかかえたロマンチストで、彼の夢は、「立派な心理学者、それも世界一の」という輝やかなしいものであった。しかし、彼の場合、将来への夢を持続させる、ということは、現状に満足しない、ということであり、禁欲に対しては気分の滅入る彼であった。与えられた環境に合せて、生活を切りつめるなどは、思いもよらぬことであった。つましく生活している親友夫妻を見て、「狭苦しい家庭に閉じ込められているフランス夫妻の身振り

17) ○本文中の日本語による引用は便宜上、谷口陸男訳「夜はやさし」(角川書店)に拠ることとした。また *The Great Gatsby* 同様、英文によるものは Scribner 版に基く。

○この個所の文章は、1931年 Fitzgerald 自身の父の死に際して書かれた “The Death of My Father” というエッセイ中の文章と殆ど同一である。

には、優美さも、ロマンチックなところもない。」と見下し、「ああ、このおれも、結局、ほかの連中と同じなのか」と自分自身に問いかける。その結果、未来に馳せる彼の夢は、「いい人間でありたい、親切で、勇敢で、賢明でありたい、そして、人から愛されたい」という、現実的で、俗っぽい願いへと変化する。この作品を書くに際して Fitzgerald が作った“general plan”の中で、Dick の弱点を、“the weakness such as the social-climbing¹⁸⁾”と書いているが、永遠性を希求するロマンチズムが、現実的願望にとって代られた時、このような弱点となって表われる。この願望は、彼にとって、宿命的なものであり、習性とも言えるものであった。

…the old fatal pleasingness, the old forceful charm, swept back with its cry of “use me!”… it had early become a habit to be loved, perhaps from the moment when he had realized that he was the last hope of a decaying clan… wanting above all to be brave and kind, he had wanted, even more than that, to be loved. (Ⅲ-10)

このように、Dick の理想主義的ロマンチズムは、成長過程で身につけた美德や弱点と結びついて、愛を求め、認められたいという心の動きとなってあらわれてくる。美しい Nicole から想いを寄せられ、愛を求められた時、自ら進んで、この甘い毒を飲み干したのも、彼の、変形した、「現実志向的ロマンチズム」ともいうべき感情が作用したからに他ならない。

しかし、Nicole とその後見人たる姉の Baby Warren の世界は、彼のいかなるロマンチズムをも、その自由な飛翔を許しはしなかった。Baby にとって、Dick は単に妹の精神病の治療のために、いわば購った医師に過ぎず、自己の人間的魅力や美德を分ち与えるために Dick が身を投じた世界の連中は、怠惰や絶望や利己心しか持ち合さない。Dick のロマンチズムは、現実への志向性という表皮のみを残して、本質的に消滅せざるを得なかったのである。

Dick という人間は、誰に対しても魅力的で批判抜き的好意を抱かせる力

18) Arthur Mizener, *The Far Side of Paradise*, p. 348.

を持っている。彼は、リヴィエラの海岸に集ってくる無国籍的アメリカ人たちの社会で entertainer として、皆に楽しみを与える。彼の世界に入れてもらうことは誰にとっても素晴らしい経験であった。しかし、彼の方では、自らの精神的浪費や放縦を意識しており、人を興奮状態に巻き込んだ後で、必ず一種の反動が起り、憂うつが生ずるのである。

The reaction came when he realized the waste and extravagance involved. He sometimes looked back with awe at the carnivals of affection he had given as a general might gaze upon a massacre he had ordered to satisfy an impersonal blood lust. (II-7)

自ら熱望して創造に励んだ愛の世界を、一方では「愛情のばか騒ぎ」と呼び、流血の戦場に喩える Dick の姿には、自己の情熱に対してシニカルだ、と評された Fitzgerald 像が重なり合ってくる。

Dick の心は、次第に責任感と使命感のもたらす緊張に耐える力を失いはじめ、加えて、Nicole の財力に自尊心は傷つき、自信や自制心は劣等感と焦燥感に変わってゆく。酒に逃避する彼には、もはや昔日の端々しさはなく、「僕は、黒死病みたいなものだ」とか「僕には、もう人々を幸せにする力はないみたいだ」と自己の崩壊を自覚するに至る。やがて、すべてを失わない、精神も枯渇した Dick は、皆の前から永遠に姿を消し、精神の優しい暗闇の中をさまようのであった。

この作品に対して、発表当時、あまりに自分自身をさらけ出しすぎる、との批判が起きたのであったが、Fitzgerald にとっては、当時の苦悩を、傷ましきの感情と共に、見つめざるを得ないものであった。2年後に出した、一層、徹底した告白である “The Crach-Up” では、自己憐憫や諧謔を伴っての自己分析となり、それが、崩壊におびえ、苦吟する Fitzgerald にとってのカタルシス作用ともなるのであった。

小説としての *Tender Is the Night* は、構成上の問題点、視点の混乱等の欠点があるとは云え、ここに見られる、醜い現実からの逃避、清らかで平穩な死の世界への憧れ、うつろいゆく美に対する悔恨などの抒情的雰囲気、同

時に存在する強い倫理意識と相まって、Fitzgeraldの本質的両面であるロマンチズムと悲劇的人生観をそのまま作品として具体化したものと言えよう。

(5)

Fitzgerald の作品に共通して流れるものは、過去への郷愁と現在への批判である。主人公たちは、過去の幻影を失なうまいと懸命になり、眼前の現実の中に、その幻影を再現しようと願う。現実のきらびやかな繁栄は、過去をよみがえらせてくれるどころか、精神的不毛という陰を裏に秘め、夢を破壊するのみならず、個人をも滅ぼしてしまうのである。Dick Diver が、第一次大戦の戦場跡を訪れて口にする文句は、このような現実に対する歎きであり、戻らぬ過去に対する弔詞である。

…all my beautiful lovely safe world blew itself up here with a great gust of high explosive love. …The silver cord is cut and the golden bowl is broken and all that, but an old romantic like me can't do anything about it. (Ⅲ-1)

詠歎の涙にくれる自己をシニカルに眺める眼があるとしても、畢竟それは、若々しい理想主義の裏返ったものに過ぎず、そこから口をついて出てくるものは、“tragic sense of life”なのである。結局のところ、彼のロマンチズムも、そしてまた彼の悲劇的人生観、或いはシニシズムも、ひとつのものの裏表ではなかったろうか。

Fitzgerald は、晩年の恋人であった Sheilah Graham に、Matthew Arnold の評論から引いた文章を示して、彼の「生き方」についての考え方を述べたことがあった。それは、“The question how to live is in itself a moral idea¹⁹⁾”というものであった。彼にとって「如何に生きべきか」ということが、自分をささえる倫理綱領のひとつであったのだ。先に引用した娘宛ての手紙

19) Sheilah Graham : *College of One* (Penguin Book), p. 99.

で言っているように、悲しみの世界を“esprit”をもって生き抜くことこそ、彼の本懐であり、しかも彼は、その姿勢自体にも一種のヒロイックで悲劇的な美しさを持たせようとしている。彼のロマンチックな体質は、どこまでも、彼自身に付きまとっているように思われるのである。1939年に書かれた次の手紙文には、それが如実に現われているではないか。

Anyhow I am alive again ... with all its strains and necessities and humiliations and struggles... I am not a great man, but sometimes I think the impersonal and objective quality of my talent and the sacrifices of it, in pieces, to preserve its essential value has some sort of epic grandeur.²⁰⁾

20) *The Letters*, p. 77, 1939年10月31日付 Scottie 宛。